

縄文の思考・弥生の思考と現代

阿子島 香

[読む館長講座⑧]

東北歴史博物館館長講座概要

2024年3月2日

「東北グローバル考古学 part3—いにしえから、今を考える—」⑧

はじめに

今年度の館長講座は、宮城県・東北地方と世界の遺跡を比較文化的に捉えて、「温故知新」すなわち現代への意義を探ってきました。令和3年度は、人類の誕生から、日本列島へのホモ・サピエンスの渡来、そして縄文時代に至る道まで、「時代を追って」考えてみました。令和4年度は、毎回テーマを変えて、人類史の歩みから「時代を通して」考えてみました。今年度は、歴史から現在にむかって「時代を超えて」考えてきたわけです。用語で表現すれば、「年代編年的」「テーマ通時的」「歴史解釈的」と言えるかと思います。本日で、3年にわたり24回となりました「東北グローバル考古学」シリーズは、完結となります。「人間とは何か」を大きなテーマに考えてきました。当館長の独自の視点を含めて、探ってきたものです。宮城県の郷土史を世界的視野で捉え直し、これからの時代の参考にしたいという講座の意図を、いくらかでも皆さんと共有できたなら、望外の幸せと思うところであります。東北歴史博物館講堂にご参集いただきまして、誠にありがとうございました。

なお、令和3年度、令和4年度、令和5年度とも、各回の講座のあとに、改めて補足加筆を行ないまして、エッセイの形「読む館長講座」に再構成しました（今ご覧になっているこれです）。各年度分ともに、当博物館のHP上に、PDFファイルの形で公開しております。どなたでも、自由に無料ダウンロードできますので、どうぞご利用ください。

プロセス考古学で日本考古学を考える

本講座のスタンスとしては、従来の日本考古学では、それほど重視されてこなかった研究枠組みである「プロセス考古学」の理論的視点で、それぞれの講演テーマ内容を組み立ててきました。この学派は、アメリカで1960年代以降に展開した「人類学としての考古学」の別名と考えてください。お話の中では、英語やカタカナが多く登場したので、閉口された皆さんもおられたかもしれませんが、日本考古学には用語があまり存在しないものですから、ご了承をお願いいたします。各回の終了後に、改めてエッセイとして再構成した「読む館長講座」（見出しでは令和4、5年度）として、当博物館HPにて公開してまいりました。反

響もいただきまして、特に専門家の考古学者の皆さんに、気にして読んでもらえているようです。話しことばで講演調ですが、一見して、多くの考古学概説書や解説書とは、論調がかなり異なることに気づかれると思います。過去を見ていく視点が人類学ベースということがあります。また一つの地域を他の多くの地域と比較して物事を考えていく「比較考古学」の視点で一貫してきました。日本だけを特別視しないという意味でもあります。過去の世界を考えるには、多様な見方があるということで、科学哲学の用語では「パラダイムの相違」と言われます。

東北縄文人の「思考」へ

さて、今回は、東北縄文人たちがもっていたであろう思想について、少し考えてみます。哲学者風にイデオロギーというと少々堅苦しく感じますが、縄文の人々は、いったいどのような考えで、日常の日々を生きていたのでしょうかということです。講座の副題は（発展段階・環境適応とエートス）としました。考古学にとって、研究対象が技術・社会・思想となっていくにつれて、実証的な復元は困難さを増してきます。けれども世界のどの地域・時代でも、思想や社会は日々の生活として動いていたのですから、決して避けては通れない課題です。

社会科学の古典（マックス・ウェーバー）や、文化人類学の「文化のパターン（型）」分析を取り上げて、人々の諸行為を背後で規定している思考の原理（エートス）とは、どのようなものか、また縄文人や弥生人の心を考えるのに、何が必要なのだろうかと考えます。ルース・ベネディクト（1887～1948）は、日本人の心性を解明しようとした『菊と刀』（1946）で知られています。日本人論の古典という位置づけの著書です。『文化の型』（1934）では、節度と中道を尊ぶ「アポロ型」のズニ族（ニューメキシコ州のプエブロ・インディアン）、情熱的で恍惚を尊ぶ「ディオニソス型」のクワキウトル族（北米北西海岸インディアン）、妖術が発達し猜疑心に満ちた「パラノイア型」のドブ島民（ニューギニア東方海上）などを解説して、人々の中にある「集合的無意識」としての文化を論じました

縄文人の「ころ」を探る

講座では、縄文時代の遺跡の構造、葬制、出土品などから選択して紹介しながら、「縄文人のころ」を考えてみました。考古学の中でも難しい課題ですので、結論には至りませんが、館長的試論として楽しんでください。縄文時代の遺跡の代表的な種類に、「貝塚」があります。教科書的には縄文人の「ゴミ捨て場」の扱いですが、集落の一部を構成し、居住区域の先の斜面にあることが多く、貝殻や骨、土器や石器、さらに仲間を葬った遺構、愛犬を同様に葬った遺構も貝塚の一部です。

亀ヶ岡文化では精製土器や儀礼的な文物等、泥炭層の堆積層などに、いろいろなモノが一緒にあります。沿岸や水辺では貝塚として残りますが、同じような場所は、内陸の集落跡にもほぼ普遍的に存在していて、「遺物包含層」と呼ばれます。縄文人は、おそらく周囲の自

然のすべてに神が宿る、すべては靈魂・精霊を持つ、カミは異界から来て、恵みをもたらし、去って再びこの世にやってくると考えました。モノを送る儀礼と信仰が一体だったと考えられます。このような「心」は、アイヌ民族とも共通性があります。

「モノ送り」信仰の一方で、自分たちの祖先はカミと化していく存在と考えたようです。縄文人の集落には墓域があり、隣り合って祖先たちと生活していました。早世した子供たちは、甕に葬られて、住居の中や近くに一緒にいて、やがて再生してくる存在だったのでしょう。生命の力は、厳しくも逞しく存在して、土偶の表象に典型的に表われています。命を生み出す力の女性としての特徴を強調した土偶が、普遍的に造形されました。気候が寒冷化して大きな集落が維持しにくくなってきた縄文後期には、各所に分かれた集落が祖先に関する儀礼の機会に集合しました。大規模な環状列石が作られるようになり、それは縄文人の祖先観を反映します。

縄文人のムラの周囲には、里山、里海が広がり、自然を変えつつ自然と共生していく景観を構成していました。過度な乱獲は行わないという掟があったでしょう。縄文の世界は決して「ユートピア」などではなく、厳しい生存の時代でしたが、強い共同体規制が長期の文化継続をもたらしました。やがて、西から稲作農耕の弥生文化が到達し、東日本の社会にも根本的な変化が起き、古墳文化の波及から、さらに古代東北の戦乱にまでつながってきます。縄文文化の伝統は、日本の基層文化を形成したと見ることは妥当です。そして現代の私達は、戦争を行なう弥生の思考と、縄文の思考を対比して考えてみるべき時に来ているのではないのでしょうか。

以上、当日配布のレジュメに従って、講演の要旨を述べました。以下に、様々なトピックを改めて取り上げて、少し詳しくご説明したいと思います。

縄文から弥生への時代転換

日本列島の中でも、東北における縄文から弥生への移行過程（文化変化、社会変動）は、列島の他の地域がそれぞれの特色を持ちながら移行したのと同様に、東北的な特色がありました。ごくざっくりと全体をみれば、まず九州北部に紀元前 10～5 世紀頃、水稻農耕文化が複雑な技術体系と一緒に伝播し、同時に相当数の人間集団が入ってきました。アジア大陸の文化変動（戦乱を含む）が背景にあったと考えられます。列島の他の地域は縄文時代晩期なので、九州の弥生早期と呼ばれます。青銅器をめぐる思想の仕組みも時代変化の一環でした。ついで弥生前期の広域的な土器様式「遠賀川系土器」を伴って、西日本一帯、伊勢湾地域のあたりまで、農耕社会がまず拡大しました。東北地方でも少数ですが、北部九州の「遠賀川式土器」の搬入品と推定される土器（岩手県二戸市足沢遺跡）、また遠賀川式に類似する土器が見つかっていて、「遠賀川系」土器と呼ばれています。東北の弥生前期土器と一緒に発見されます。青森県松石橋遺跡、秋田市地蔵田 B 遺跡（「弥生っこムラ」という史跡公園）などです。

縄文から弥生への変化は、かつては、先進的な農耕文化が停滞していた狩猟採集文化に取

って代わり、獲得経済から生産経済へ移行したのであって、稲作農耕の開始を以って、弥生時代とする、(ちなみにですが、古墳時代の開始は、前方後円墳の成立を以って、縄文時代の開始は、土器製作の開始を以って、と時代区分の基準は異なっています)、と定義されました。1980年代頃までです。各地で地域研究が進んだ結果、縄文と弥生の関係は、たいへん複雑な様相を伴っていたことが判明してきました。

東北では、九州での弥生文化開始から600~700年位で、日本海岸を經由して、農耕文化は津軽半島まで比較的早く到達しました。弥生時代の開始年代論をめぐる背景には、近年の放射性炭素年代測定(AMS法)の進歩がありました。AMS法という、炭素同位体を直接測定する方法で、C14の崩壊による放射線量を測定するベータ線法よりも高精度で、試料の量も微量で可能となりました。なお、弥生文化開始の年代については諸説あり、特に文物のクロスデATING(考古学的編年による交叉年代法)の立場からは、厳しい異論もありました。

東北の稲作農耕文化の始まり

青森県田舎館村の垂柳遺跡(たれやなぎ)は、東北大学の伊東信雄先生が、1958年(昭和33)に発掘調査を行なって、東北地方でも稲作農耕社会が成立していたことを解明しました。かつての通説では、東北地方は遅れた地域という前提で、狩猟採集社会が長く持続していたと考えられていたのです。その後、1980年代になって、この遺跡周辺では水田の遺構そのものが発掘調査で検出され、伊東先生の学説の正しさが証明されたのでした。さらに古い砂沢遺跡(弘前市)でも、水田遺構が検出されました。近年この地域では、異なった品種のイネで絵を作る「田んぼアート」が地域おこしとして有名になりました。東北のコメ作りの弥生ムラが発掘調査された地で、このような地域イベントが盛んなことに、何か不思議な縁を感じます。

さて、東北地方の弥生文化への移行は、実際に暮らしていた縄文人からの視線で見ると、どのようなものだったのでしょうか。一般に、文化が伝播する現象では、いくつかのプロセス(過程)が相互関連するわけです。人間集団が移動してくる、先にいた集団(先住者)と生態学的に棲み分ける(狩猟民があまり活動しない地域で農耕を行なうなど)、同じ生態学的な場(ニッチェ)をめぐる競争する、新集団が旧集団に文化的優位を示して文化変容が生じる、両文化が融合していく(世代を越えれば、婚姻関係の結果もあります)、先住集団が主体的に渡来文化の要素を取り入れて、選択的に自らの文化を変化させる、などなど、さまざまなプロセスがあります。今回の講座で試みているトピックは、「思考」(イデオロギー)という領域です。東北縄文晩期人は、後の東北弥生人と比較して、あるいは西日本の弥生人と比較して、どんな思考をする人々だったのでしょうか。難しい問題ですので、これまで論じられることは少なかったようです。試論的に考えてみましょう。

縄文から弥生への過渡期にも、拠点となった集落があり、また周辺に小さな遺跡も散在します。拠点となった集落は、考古学用語で「基幹集落」とも呼ばれます。近年の宮城県内で、代表的な調査成果としては、大崎市田尻にある北小松遺跡があげられます。『宮城県文化財

パンフレット』(2022)の一冊にもなっており、文化財課による一連の正式調査報告書の膨大な成果に基づいて、分かりやすくまとめられています。この縄文晩期の大集落と周辺の遺跡群は、どのような関係にあり、縄文人の生業と日常生活はどのようなものだったか、こういった問題意識から、当博物館の小野章太郎学芸職員を中心にプロジェクトを推進しております。日本学術振興会の科研費も活用して、植物遺体の分析、ボーリング調査などを進めています。大崎市周辺での広域的な視点から、縄文の狩猟採集社会から、弥生の農耕社会への変動を探る研究で、当館の研究紀要などでも成果公開を進めております。

鍛冶沢遺跡と山王囲遺跡

北小松遺跡では、弥生時代前期になると、拠点の集落は終焉を迎えました。その背景に、大崎地方を広く襲った大洪水がありました。北小松遺跡でも、厚い洪水堆積層が、縄文晩期の豊富な文化層を覆っていて、縄文人が水辺の暮らしに適応していた生活様式は、変わらざるを得ませんでした。人々は何処へ行って、どうしたのか、今後の課題として残ります。

一方で、宮城県内には、縄文時代晩期から、弥生時代前期・中期にかけて、基幹集落として継続している遺跡もあります。ここで紹介するのは、蔵王町の鍛冶沢遺跡、栗原市一迫の山王囲遺跡です。両遺跡とも、館長は関わりがありましたので、取り上げてみます。

鍛冶沢遺跡は、南蔵王山麓にあり、白石川支流である松川の西岸、名峰青麻山(799m、大苧田山とも言われ古来山岳信仰の対象)の東山麓に位置します。青麻山の東麓一帯には、大きな縄文時代遺跡がいくつも存在していて、曲竹(まがたけ)の鍛冶沢遺跡は明治時代から知られていました。縄文晩期の結髪型土偶の優品(宮城県指定文化財)や、土器、石器などが多数出土していて著名でした。1970年頃に水田開発があつて一部が調査されてきました。個人的なことですが、私はそのころ所謂「考古少年」で、仲間たちと鍛冶沢遺跡や白石市深谷の縄文遺跡で土器や石器の「表面採集」(表採)に励んだ経験があつて、当時は畑に入って遺跡を探してもあまり叱られず、熱心に勉強しているね、などと声を掛けられたような、今は昔の時代でした。

鍛冶沢遺跡では、農道の整備工事に先立って、2007年～2008年に宮城県教委文化財保護課(当時)による事前調査が実施されました。亀ヶ岡文化の土器、石器など非常に多数が出土し、また弥生時代前期の再葬墓が発掘されました。再葬墓というのは、文字通りいったん埋葬した遺体を、再び葬る習俗で、骨を集めて大きな土器に入れます。(スライドで、再葬墓と巨石、動物形注口土器(ウリンボウ形)、土偶など紹介)。掘立柱の建物跡が、広場と墓域を囲むような配置で検出されました。縄文後期から晩期の基幹集落だった遺跡ですが、弥生時代になっても同じ場所で継続していた状況がわかります。当博物館のテーマ展で(「鍛冶沢遺跡 - 蔵王東麓の再葬墓」、2020年7月～11月)ご紹介しました。

蔵王山麓は、江戸時代に野生動物の宝庫として知られていて、仙台藩による巻狩り(軍事演習でもあつた)が何度も行なわれた場所です。白石市福岡深谷には、巻狩りを記念した珍しい石碑『鹿二千供養塚』が残っています(スライド)。天和4年(1684)には、伊達綱村

公の大巻き狩りが行われて、白石城主・片倉村長公は、総奉行を務めました。片倉家中の片倉三右衛門が「山ご案内役」を務めて、7日間で1329名を動員し、鹿、猪、狼など459頭を狩猟したと記録されています。少し話が広がりましたが、縄文人たちが生業の拠点としていた地域の特色が知られます。

山王囲遺跡は、栗原市（旧一迫町）真坂に所在する縄文晩期から弥生中期にかけての基幹集落です。長崎川北岸の自然堤防上に立地していて、伊東信雄先生により1965年に行われた発掘調査では、厚さ3mにおよぶ遺物包含層が調査されました。低湿地に形成された泥炭層で、漆製品（籃胎漆器、櫛、腕輪、耳飾）、撚糸で作った編布（あんぎん）、多くの完形土器、石器、骨角器、土製品など、当時の生活実態を解明する上で貴重な資料が出土しました。遺跡は1971年に、国指定史跡となりました。史跡の内容を確認して整備を進めるために、1995年～1999年に旧一迫町による調査が行われて、東北大学考古学研究室が全面的に協力しました。縄文晩期の遺物包含層、柱穴群、土壙など遺跡の内容が明らかにされました。弥生時代前期の竪穴住居跡3棟、長さ140mに及ぶムラを囲む大溝、小児の土器棺墓、稲の収穫具である石包丁などが確認されて、基幹集落だった山王囲のムラは、縄文から弥生へという大きな時代転換を乗り越えて、継続していった状況が判明したのです。遺跡では栗原市による史跡整備が完成して、遺跡公園と「山王ろまん館」として公開されています。調査に協力できた一人として、感慨深いものがあります。

縄文・弥生の継続と断絶

いくつかの事例で見てきましたが、東北地方では、縄文から弥生への転換というのは、文化が全部がらりと一変するような、「農耕社会の征服」的な過程ではなくて、従来の縄文社会がイニシアティブを保持したまま、選択的に農耕という生業を取り入れていったプロセスという面が強いと考えられるでしょう。縄文土器文化は、地域色を保持した各地の弥生土器型式となっても、縄文時代の土器製作の伝統を伝えています。沈線（刻み線）で区画した内部に縄文が施文されるモチーフは、東北弥生土器の特徴の一つです。仙台平野では、弥生中期には安定した農耕村落が確立しました。

今日のトピックである「人間類型」という面から考えてみますと、おそらく東北弥生の人々は、心性においては、東北晩期縄文人の「文化の型」（後述）を受け継いでいたのではないかと私は考えています。集落立地の基本的な継続（洪水、津波などの災害、気候寒冷化などに、対応していきました）、ムラの領域の認識、自然の恵みと再生の観念、農耕を行ないながら自然と共生関係を作るといふ、縄文以来のイデオロギーは、受け継がれていたように思います。東北において「縄文の思考」が継続していたとするならば、西日本で新たな革命的なイデオロギーとして発達した「弥生の思考」とは、対照的な人間類型があったのかもしれない。より多くの収穫を目指し、より広範囲の水利権を確保し、隣接する村々と戦いも辞さず、余剰生産物はさらなる再生産のために回し、蓄えは階級を発生させる方向に働きました。すなわちサーリンズが強調したような共同社会における「一般的な互酬性」

generalized reciprocity を逸脱することが許容されるようになり、共同体と個人（個人の集合）との関係が、縄文の思考におけるような「平等社会」の原理から変質していきました。弥生時代には、縄文時代には見られなかった「組織的な戦争」が起きるようになりました。

人びとが共有する世界観においては、天と地の間を、万物は循環する、命が消えたものはやがて再生する、という縄文の思考から、カミ（天、神）とヒト（地、人）の間を取り持つ人々の存在が重要となる弥生の思考への、大きな転換がありました。シャーマンのような存在は縄文と弥生の両時代に共にあったようです。魏志倭人伝にある邪馬台国、卑弥呼の「鬼道」の解釈にあるように、カミの意を受けて天と地の間にあるという、人民に対する支配者の権威を伴うクニの機構すなわち古代社会の国家形成への原理は、多くの社会に共通するものです（読む館長講座、令和4年度⑦「首長から王へと至る道」、令和5年度①「石器時代の経済学」参照）。縄文の思考の場合は、共生関係にある自然と人間との間を一体化し、自然の力を我が物にする共同体の営みの一部としての、特異技能者によるシャーマニズム儀礼という性格が強かったと考えられます。病気平癒、食料資源の豊穡、霊的存在の憑依などの局面があります。すなわち世界と人間の間を強化する役割であったように考えられます。

考古学と「人間類型論」

あまり考古学の本には出てこない言葉ですが、社会科学には広範囲に「人間類型論」として論じられてきた分野があります。ある集団を取り上げれば、当然のこととして、構成員の間には大きな個性が認められます。個々人の性格や資質も多様です。しかし、集団を全体として見ると、やはりそのグループが持つ特有の行動様式や、行動をもたらす考え方があります。思考実験で考えてみましょう。どこかの国際空港にいます。日本人、フランス人、中国人、ロシア人、（アメリカ人は、それぞれ個性を持つ多様な集団から構成されていますので、少し保留として）、が10人くらいずつ、いたとします。そこで、それぞれどのような行動をしているか、ちょっと観察してみましょう。（皆さんのイメージがあると思います）。このような「国民性を見る」経験を考えますと、確かに差異があります。どのように定量化できるかは大きな課題ですが。

古来、哲学などでもこのような、人々の「思考の違い」と、そこから来る「行動の違い」は、考察の対象になってきました。思考と行動の違いはいったいどこから来るのでしょうか。マルクス主義的に「存在が意識を規定する」という考え方が一方であるとすれば、集団意識の中に強固な実体があって、行動を選択させていくという考え方もあります。いわば「鶏と卵」の例えに似ているかもしれません。哲学史では「エートス」というギリシャ語が、性格や慣習を意味して、アリストテレス以来の長い間、使われてきました。

さまざまな行動をまとめていく、精神の構造で、人々の内面に存在するのがエートスです。ヴェーバー（1864 - 1920）は、この考え方を復権させて、深く論じました。代表的著作に『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』（1905）があります。実は私はこの著作

にある思い入れがあり、私事ですが失礼します。ニューメキシコ大学留学中に、文化人類学の授業で、文化理論の学説史を学んだ時です。スペイン農村の民族学を専門とされるリチャード・バレット教授が、意識と存在というテーマに関して、ヴェーバーのこの本を課題図書とされました。しかし、とても難解でまるで歯が立たず、ちょうど日本語訳が入手できたので助かったと思いきや、とても難解で同じでした。

大学院レポートを「儒教の倫理と資本主義の精神」の題で書き、良い成績はもらえましたが、1980年代のその頃は、日本製品の集中豪雨的輸出があり、自動車の都デトロイト（ミシガン州）では、米国人労働者たちが日本車を公開でこわすデモがあり、”Japan as Number one”などとジャーナリズムで論じられた時代でした。今は昔の感があります。当時の東アジア諸国の経済発展は、経済のみによっては説明できず、文化的なエートスの意味が論じられていました。一方、アメリカ考古学では、適応や生業から文化現象を説明しようとする唯物的なプロセス考古学に対して、ポストプロセス考古学が登場した頃です。先史の遺跡を残したアメリカ・インディアンの子孫たちが、現在の民族誌の中では実にさまざまな価値や行動のエートスの体系を維持しているフィールドで、考古学的文化を残した「人間類型」について考えなければなりませんでした。

帰国後、独自の「大塚史学」で名高い大塚久雄先生（1907 - 1995）の、『社会科学における人間』（1977、岩波新書）を読み直して、いくらか理解が進んだ思い出があります。イギリスの近代資本主義の成立を準備した「エートス」は、ロビンソン・クルーソーの漂流記に描かれた「ロビンソンの人間類型」に認められるという発想は、目からウロコが落ちる気持ちでした。資本主義の生誕に大きく貢献したのは、世俗内的禁欲というピューリタンの日常的な規範であり、それが結果的に、投資と資本の本源的蓄積に導いたのであった。ピューリタンの考え方であった営利の追求の制限・敵視とは、別の結果を世界史にもたらしたのであったと論じられます。

では、縄文時代や弥生時代に、支配的だった「人間類型」とは、いったいどのようなものだったのか、という問いかけに通じるところがありました。あるいは本日の題目の「縄文の思考」の思考とは、行動をもたらす意識の体系という意味での「イデオロギー」と言い換えてもいいかもしれません。縄文集落に生きていた人々は、ニュートラルな透明人間ではなく、価値体系と行動規範を確固として持っていて、それにより社会が存続したはずなのですが、考古学の教科書的には、ほとんど論じられることもありません。

縄文人の人間類型と認知考古学

さて、ここでプロセス考古学のひとつの発展形と、私が考えているのが、「認知考古学」です。プロセス考古学は、1960年代の「ニュー・アーケオロジー」から発展したのですが、文化人類学の系統としては、「新進化主義人類学」が大きく影響しました。スチュワードの「生態人類学」、ホワイトの「文化進化論」などでした。結果的に、人間集団（文化システムの担い手）が、自然環境、社会環境など外部と結び結ぶ相互関係に着目していく研究

となりました。従って、人間集団内部に確固として存在していた認知の体系（周囲を認識し、行動を選択していく）に対する考察は、不十分なところがありました。1980年代以降、プロセス考古学への反動としての「ポストプロセス考古学」が登場して、両者の間にさまざまな議論があり、具体的研究が積み重ねられました。両学派については、『ムカシのミライ』（2018、阿子島香・溝口孝司監修、勁草書房）が参考になるかと思います。

プロセス考古学の反省の中から、当時の人間集団が有していた認知の体系が、実際に文化変化や社会発展に対して果たした役割に注目する考え方が出されました。端的に、古代文明の巨大建造物をもたらしたのは、パンとムチのみにはあらず、人々を結ぶ思想でもあった、といった考え方です。単純化になってしまうかもしれませんが、身近なたとえで言ってみますと、対話を行なって相手の行動を分析しようとする時に、分析者の枠組みで相手を評価するのに加えて、相手が持つ目線に立って、改めて相手の行動を理解する、という図式になるのでしょうか。上記図書では、プロセス考古学 vs ポストプロセス考古学という考察になってしまいました。認知考古学的な視点が不足していたかと、若干の反省もあります。さて、考古学研究の現状を鑑みるに、縄文人のエートス・人間類型と、弥生人のそれとを今、問い直すべきではないかと思ひ至り、取り組み始めましたが、「日暮れて途遠し」の感があります。

縄文土器の型式学的研究の精密さでは、日本考古学は世界のどこよりも緻密な分析を蓄積してきました。日本中に張り巡らされた、1万数千年にわたる縄文土器の編年表（遺跡名を標識とします、さらに細別されて数字や記号がつきます）を一見するだけで、それぞれの型式名、型式細分名が、実際の土器資料の実体を反映していると知られて、初学者に限らず気が遠くなるほどです。土器型式のグループは、ある種の共通の気風のような紋様や器形を有していることも広く知られています。縄文中期でみると、中部高地から北陸の火焰型土器、中・南東北の大木式土器、北東北の円筒式土器などです。土器型式の地理的なまとまりは、何らかの共通の人間集団の広がりを表わす、部族のような集合を表わすともいわれてきました。このような共通の気風から、人間類型に関する何かを読み解くことはできるのでしょうか、難しい問題です。縄文中期の、雄渾な器形、荒々しい渦巻く紋様、また縄文晩期の、工芸的な薄く繊細に見える器形、細密な入り組んだ紋様、それら両者を製作した集団は、共通の人間類型を有していたのでしょうか。それとも行動を規定するエートスには対照的な何かがあったのでしょうか。このような課題は、直観的に問いかけられることはあっても、あまり追求されてはきませんでした。まず、心理学や行動科学等の隣接分野との協力で、通文化的かつ実証的な方法論を探究することが必要です。縄文土器の顔の表現などは、有望な対象と思います。

文化人類学の人間類型論

集団を対象とした社会科学が成りたちうるのは、人間類型の存在を前提とするともいえます。文化人類学の動向を見てみます。心理学との接点があるので、「心理人類学」の分野とも言われます。学史的に遡ってみますと、ルース・ベネディクト（Ruth Benedict, 1887-

1948) の『文化のパターン』(1934) *Patterns of Culture* が古典的です。『文化の型』とも訳されます。ベネディクトは、フランツ・ボアズの弟子の第一世代です。文学少女でしたが、コロンビア大学大学院に進学して、ボアズの門下生となりました。また文化とパーソナリティ研究の先駆となったマーガレット・ミードを指導しました。

「文化の型」は、国民や、その部族の成員が共有する無意識（集合的無意識）の中に存在していて、長期にわたって変化しないもので、その文化成員の標準的な性格 *modal personality* を形成するとしました。文化的事象が、無意識的に形成される過程を分析しました。それは、人間集団が、永続的な社会生活を営むために必要な、一定の思考と、行動の型とを、形成し、保持すると考えました。講座では、次の3つの民族を、スミソニアン協会のアーカイブスなどから、紹介しました。

ニューメキシコ州に居住するプエブロ・インディアンのズニ族は、ベネディクトによって「アポロ型」(アポロン型) とされます。ギリシャ神話に由来する名称です。プエブロとは集合住宅建築(スライド)で、人々はそこに集住しています。秩序と慎み、落ち着きを重視して、節度と中道を重んじる人間類型があります。シャーマニズム儀礼は行ないません。強烈な刺激は避けるとされます。ズニ族は土器製作技術でも知られていて、写真のような動物意匠の壺を、頭上運搬します。

北米北西海岸インディアンと呼ばれる人々は、狩猟・漁労・採集を生業としながら、定住生活を発展させて、かなり複雑な社会を形成していました。しばしば縄文文化を考察するに際して、類推するための民族誌として参照されます。青森県の三内丸山遺跡を考察する文献でも、時々登場する人々です。サケ・マス類の漁労に優れ、カヌーを高度にあやつり、村落にはトーテム・ポールを立てる文化を持っています。ベネディクトは、その中のクワキウトル族を「ディオニソス型」の文化としました。互いに競争心が強く、情熱的な性格で、陶酔や興奮を求める性向があります。陽気な性格ですが、儀式に於いて恍惚状態に至ることを重要視します。よく知られている習俗に、浪費的な競争である「ポトラッチ」があります。これは自分の財産の破壊を競って、そして自らの社会的な地位を維持するというものです。ベネディクトによれば、北米の平原インディアン諸族の中にも、ディオニソス型の特徴をもつ部族があり、第7騎兵隊を全滅させた戦闘的な人々は、この気質であるとしています。

メラネシアのドブ島民は、ニューギニア東方海上の島々で、クラ交易を行なう人々の一部です。ダントルカストー諸島という地域で、土地は起伏が激しく、やせている土壌で、ヤムイモを栽培する焼畑農耕を行なっています。土地への執着心が強い人びとです。ベネディクトは、「パラノイア型」(偏執型)と呼んでいます。猜疑心がたいへん強く、精神文化では、呪術、妖術、黒魔術が発達していると特徴づけられます。

ベネディクトは、このように、諸民族の気風、文化の特質を、「パターン」として類型化して把握したのでした。その後、さまざまな批判はありましたが、「文化」は人々の心の中に実体として存在し、それが行動の選択をまとめているという、文化行動を環境などの外的要因に還元してしまわないで、文化は文化の脈絡から説明していくという考え方の原則は、

大きな影響を残したといえます。また、日本人の特性を論じた『菊と刀』(1946)は、日本でも翻訳されて(1948)広く読まれました。西洋の「罪の文化」に対して、日本文化は「恥の文化」であると論じました。自身は日本に足を踏み入れたことはなくて、太平洋戦争での捕虜のインタビュー、映画、文学作品などから、日本人の行動や文化現象を分析し、その背後にある独特な思考や気質を解明するという方法でした。1936年にコロンビア大学で職を得たのと前後して、米軍戦争情報局の一員となり、日米開戦後は日本班チーフとして、戦地におけるアメリカ人が理解できない日本人行動を、理解しようとしたのでした。「人類学者の戦争協力」と批判されることもありますが、異文化の本質を理解するとは何かを問いかけているように思われます。文化はそれぞれの論理で動く、また優劣を論じることはできないという「文化相対主義」をボアズから引き継いで、具体化した一人であったと、私は学史的に評価しています。

縄文時代の人間類型について

さて、話題が広がりましたが、今回の講座でどのような部分を問題にしたいと考えているかは、いくらか説明できたかと思います。ごく試論的にですが、少し考えてみましょう。縄文人の「エートス」とは、どんな風だったのでしょうか、非常な難問ですね。

まず、「ムラの一員である」ことが、最重要な前提としてあった人々でした。ムラの掟(おきて)を体現する人が中心の社会でした。先祖代々の「おきて」を学び、守ることが求められていました。(かつての歴史学での用語に、「共同体規制」という語があります)。

掟は、長い間が変わっていくものです。土器の内容が時間の経過の中で、大きく変わっていくように、不変のものではありませんでした。しかしムラの構成員が意識的に変化を計画して主体的に変えていくような、短期的な変化ではなかったでしょう。世代を越えてムラが存続していくなかで、行動のいろいろな変化が起き、多くの文化的な変化のうちで、長期的に環境適応に整合する行動が、選択されて残ったと考えられます。人間集団の自発的な意志で行動を変えろというより、さまざまな試行の中から、より選択圧に適合する行動様式が、結果的に残っていくプロセスの繰り返しであった、と考えられます。これは、ビンフォード氏が一貫して述べている文化観です。人々の意思よりも長期的な選択という、いかにもダーウィン主義的な社会変化の理論ですね。

少し専門的になりました。例えば、縄文中期末から後期前半への文化変化において、大きな集落に集住していた人々が、分村の過程を経て、広域的に散在するようになりましたが、それらの集落を結ぶ紐帯は、祖先信仰を共通にする親族関係に基づいていた、そして大規模な配石遺構(ストーンサークル)を共通のシンボルとして、まつりを行なうように、「掟」が変わった、というように考えます。この長期的な(個人が生きている期間を越えるような)文化変化は、気候変動の冷涼化が背景にあると考えられます。変化後は変化前よりも、選択圧に対して、より適応的であったという考え方です。ことばを換えれば、さまざまな多様化のうちに、より適者が残ったということになるでしょうか。

縄文人の里山と里海

岡村道雄（2018）氏は、縄文人の生活の中での里山、里海の大切さを強調されています。縄文文化は、単に所与の環境に適応するという一方的な方向で、文化内容が規定されたのではなく、縄文人が環境に働きかけて、環境を変えていき、相互的に共生するようになったのであると。それは、農耕のような食料生産経済とは異なるが、環境に働きかけ変化させて生業を継続的に成り立たせるというものであり、一種の生産とも言えるのではないかという趣旨で、里山、里海論を展開されています。周囲を取り巻く自然と、季節の廻りについての非常に深い民俗知識が縄文人たちの背景にあり、食料資源の確保と生活の安定、定住生活の継続がそのようにして可能となり、長期的な縄文文化の存続という結果をもたらしたという趣旨です。傾聴すべき指摘と思います。獲得経済か生産経済かという、二者択一的な生業観を、見直すものと言えるのではないのでしょうか。

ここから人間類型論的に考察を発展させてみましょう。長期的な環境との共生は、周囲の自然の状況に対して、絶えまない細部への関心を前提とします。きめ細かな自然観察の眼が絶えない、周囲を注意深く観察し続け、微妙な変化を感じ取り、対応する、そのような行動の型が考えられます。天候の変化、海の変化、山と海の季節の移り変わり、尋常でない年の認識、このような周りを知り尽くす人間像が想定されるのではないのでしょうか。それらの認識は、後進、子孫たちに伝える知識となります。里山、里海の先には、深山、外洋が同心円的な広がりをもって存在していますから、山への信仰、海とあの世、といった、世界の成り立ちを説明する思考は、縄文の世界観として、持たれていたでしょう。

ムラの一員という存在は、またムラの領域の及ぶ範囲という地理的な認識にもなっていたでしょう。すなわち、ムラには領域性（テリトリー）があり、共同体の一員としてテリトリーを守る存在という意識が、思考の枠組みになっていたでしょう。ムラ意識とテリトリー意識とは、人間類型において一体化していたのではないのでしょうか。ココまでは守る、それはワレラの義務、といった領域観でしょうか。なぜならば、領域の内外の自然を変えて、共生を継続して来た共同体のメンバーとしての、人間類型であったから、と考えられるのではないのでしょうか。

しかしながら、もっと捕獲する（収穫する）ことを目指す、より多く産物を得る、もっと広大な地域を支配する、他の集団と競合すれば、組織的に戦争に行く、という人間類型ではなかったでしょう。もっと欲しいからと資源の乱獲を行えば、環境との共生関係は崩壊します。また、他集団は、争いの相手で、殺してもやむを得ない、（でないと敵に殺される）というのは、「縄文の思考」ではなくて、「弥生の思考」の人間類型になってから、出現してくる新たな発想と考えられます。実際、縄文の世界では、集団間の組織的な戦争は、確認されていません。

リーダーと階級

果たして、縄文社会に階級的な分化があったか、これは議論が分かれる論点です。近年、縄文式階層化社会論などとして議論される課題です。容易に結論を出せるものではありませんが、少なくとも縄文時代の終わりごろ（後期から晩期）に向かって、集落の構成員は皆平等で同じ、とは言えないような資料が増加しています。墓地の中で個人差が生じています。また特定の家系を示すような現象もあります。子供のころから貝輪をはめるなどです。しかし、墓地は最後まで共同墓地が原則で、支配者を思わせる突出した厚葬はなく、社会の基礎は共同体であったと考えます。リーダーとしての資質に富む、ムラのふさわしい指導者は、当然いたでしょうし、共同体をまとめて導く人物は尊敬されて、縄文時代の「人間類型」を象徴的に具現するような人格だったのでしょう。酋長的な地位を持っていたかもしれませんが、制度化された世襲の「首長」ではなく、支配者層・貴族層ではなかったでしょう。（繰り返しますが、あくまでも長年の私の研究経験を総合しての、「私見」ですので、ご了解願います）。直接の類推ではありませんが、19世紀のアメリカ西部開拓時代、激動の社会をまとめた部族のリーダーたちのような人格が思い浮かびます。

まとめてみますと、縄文社会では、共同体のリーダーは存在し、さまざまな格差はあったとしても、個人的な資質に基づくもの、特定の技能に基づく家系であって、社会階級という段階ではなかったと考えます。特定の家系は宗教的・呪術的な側面、あるいは特殊な工芸製作などに優れる人々、医療などの民俗知識、天体観察などの知識の受け継ぎなどがあったかもしれません。子供の頃から修練を積み、また特別な身なりや装身具をつけるなどのことは、多くの社会に存在することです。しかし、必ずしも生産関係で定義される階級や、社会構造として存在するわけではありません。経済人類学において、サーリンズは「一般化された互酬性」(generalized reciprocity) という概念を提起して、広く認められるようになりました。狩猟採集社会のような平等社会では、共同体で資源を分かち合うことが原理となっていて、モノのやり取りは価値を相互に計算するような性格ではないというものです。またビンフォードは、互酬性が拒否されることを許容する社会過程が生じる時、階級社会に至る道が用意されるという考えを示しています。

アメリカの新進化主義人類学では、部族社会の次の発展段階として、首長制社会が設定されています。諸説ありますが、首長制社会の確立過程では二つのモデルが考えられています。生産物の再分配型首長制、ビッグマン型首長制です。個人的な資質に優れている人物をリーダーに、その周りに従う者たちが集まってくる社会形態が後者とされます。縄文時代後期・晩期に首長制社会への胎動があったとするならば、そのようなビッグマン型の社会階層化に加えて、何らかの親族関係のネットワーク（氏族、リネージなどの、居住村落を超えた広域の繋がり、婚姻関係をも規定する要素）がある種の權威を保つようになった社会過程、また遠方から由来する物品（ヒスイ、ネフライト、黒曜石など石材、アスファルト、特定の貝殻と装身具など）、周囲の地域社会との交易経済活動（海地域と山地域、特産物としての塩や食物など）が、有力人物の周りにまとまってくる社会過程のような、社会構成における複

雑化（単に「みんな平等」という以上の複雑化）が、発生していたかもしれません。（繰り返しますが、私見です。今後の考古学研究は直接には、目に見えない部分を理論化していくことが重要な段階にきていると考えています。）

縄文少年少女は、「学ブベキコト多スギー？」

ムラ社会で育つ縄文少年少女を想像しましょう。大人になるまでに、何と学ぶべきことが多いことでしょう。周りの自然のそれぞれについて、非常に多くのことを覚えて、行動を身につけなければなりません。動物、植物、岩石、地形、天候、遠くの地理（あの山の向こうには・・・）、近くの地理（その川の流れとサカナの居場所・・・）、我がムラのテリトリー、海へ乗り出すやり方、観天望気、季節の移り変わり、遠方の文物が来た時の取引の仕方、石器の作り方の熟練、土器の正しい作り方の学び（これは少女）、土器の形と紋様の世界観的な意味（お祖母さんから母に伝わったことを学ぶ）、薬やケガの治療法、ほかにも無限に思われる生活のための「民俗知識」（現代の用語ですみません）を学び、一人前になっていきます。そしてムラの掟を体現する望ましい人格を育て、リーダーになるべき縄文少年たち、家族の中心になり男たちに指図しつつ、ムラの姿を存続させていくべき縄文少女たち、みなさんに幸福が来ますように！ 行動はなかなか考古学資料に残りませんので、こういったことの内容を推定するのは実は困難です。しかし、石器の製作法は、出土品で残りますから、たとえば子供たちが練習した結果ではないか、という研究は可能で、実際に進められています。

最も重要なのは、周囲の自然を、皆が共生していく存在として、あるべき姿を保つように、手を加えていくことだったでしょう。里山と里海を、生産の対象として作り変えていったのが縄文人でした。着々と自然を管理する一方で、冒険心には富んでいた人間類型だったでしょう。たとえば、特定の種類の貝を捕獲して、貝輪を作り身につけることなどがありました。（オオツタノハは容易に捕獲困難な貝種であることは、忍澤成視氏の長年の研究が示すところです）。外洋に出る、猛獣と戦うなど、危険のある行動では勇気が示されることとなります。また、遊び心は豊かで、すごい量と種類の、多くの日常の仕事をこなしながら、ジェネラリスト（なんでも自分で作るような文化、カナダなど北方狩猟民の民族誌を見ると想像できます）としてのモノづくりでは、芸術の才を発揮しました。時間を費やさなければ完成しないような工芸の腕を競いました。たとえば亀ヶ岡文化の土器や漆製品などの工芸に、「縄文の遊び心」を読み取ることができます。

縄文人の人生は短く、乳幼児死亡率は高い世界でした。少年少女まで成長できたとしたら、その平均寿命は30～35歳でした。病気や事故は多くありました。縄文時代の半ば以降には、拠点集落（基幹集落）を中心とした地域経済の、相互をつなぐ交易が広範囲に行なわれていましたので、疫病が入ると悲劇的な事態が到来したかもしれません。そしてムラには、老齢に達したメンバーもいました。老若を問わず、死というものが、いつやって来るか、分からないという人生で、まわりの万物（森羅万象）は命を持ち、循環して再生してくるという世

界観を持っていたようです。子孫をつなぐことは容易ではなく、神聖なことで、土偶、石棒、などの性神信仰は深く、共同体の祭祀（ムラのまつり、集落の広場が舞台）は重要でした。祖先たちの霊は、ムラの中に一緒に暮らしていました。早世した子供たちは、身近な場所に葬られて、やがて再び戻ってくる存在でした。東北・北海道の縄文土製品（土版）の中に、子供の手形や足形があります（手形付き土製品、足形付き土製品）。現代の思考では成長を願う記念と思いたいですが、形見という説もあります。その子がどうなったのか分かりませんので、何とも言えません。出産は命懸けで、カミに祈るための精霊の依り代として、旧石器時代のヴィーナス像からの系譜を引いた土偶に祈ったのであると考えられます。土偶はまた、豊穡をもたらすカミへの信仰（宗教学的に、大地母神という概念があります）の代表的な体现であるとも考えられます。（土偶についても、諸説あります）。

まとめ：縄文の思考・弥生の思考と現代

今回は、講座としてはやや異色かもしれませんが、従来それほど追求されてこなかった分野を取り上げてみました。縄文人の「人間類型」を考えるという課題です。縄文の世界は、決して「ユートピア」などというものではありませんでした。非常に厳しい生活の中で、しかしながら長期にわたり集団は継続し、縄文文化は維持されていきました。個人という以前に、共同体が重要だった時代でした。

話題が非常に多岐にわたりましたので、縄文のエートスを考えるということで、最後にまとめておきたいと思います。本文との繰り返しもありますが、要約としてご覧いただければ幸いです。

縄文人の集団は、環境との共生を確立していました。環境に適応するだけでなく、環境へ働きかけて、集落の周りの環境を変えていきました。この結果「里山」「里海」というゾーンは、集落から同心円状に広がっていきました。縄文時代研究では、さらに奥山、外海までが考察の対象となります。そして、このような共生関係は、定住の開始と確立（縄文時代前期ころから次第に進みました。地域による差異が大きいところがあります）につれて、確固とした関係になりました。

農耕については、日本考古学の研究の歴史から、稲作農耕のみを農業と同一視して、農耕か狩猟採集かという、いわば二者択一的な考え方が強くありました。しかし、縄文時代はこのような二者択一的な考え方では、とらえきれない複雑な状況がありました。狩猟採集、漁労、に加えて、各種の働きかけ（半栽培）、樹種の保護と収穫（ウルシ、クリ、食用・薬用植物）、栽培（エゴマ、アズキ、ダイズ）など、縄文時代のなかでも、各時期や、各地域の共生関係のなかで、さまざまな複雑な「組み合わせ」ができていました。

日本列島の内部で、土器型式の分布圏が、時期を越えても類似する境界を示す現象、また分布圏が拡大したり縮小したりする現象が認められます。古い時期から部族・民族の固定したまとまりがあった（土器型式を人間集団の範型を示すと解釈）と考える学説もありますが、むしろ非常に複雑な自然環境との共生関係が長期的に維持される必要があるので、環境の

大きく異なる土地に移動することが、適応的に不利である（端的に、針葉樹林帯、広葉樹林帯、照葉樹林帯、沿岸と山地など）ほどに、共生関係の深まりと民俗知識の集積とが高度化していた要因が大きかったからではないかと考えます。

縄文人たちの、集団から個人への行動の「しぼり」は、非常に強力でした。無意識の域にも達する規制でした。歴史学では、共同体規制といわれます。その限定枠の中で、芸術的感性は、土器に、工芸に、花開きました。集落には、場所（ムラの空間）の配置があり、居住する区域、中央広場、竪穴住居、掘立柱建物、大型住居、通り道、お墓（祖先、幼年者、異常死者）の葬り方が決まっていました。集落の中や、周りに、おそらく違和感なく、死者たちは眠っていました。やがて、祖先の霊となり、また新しい命として再生してくる存在でした。「命の循環」の思想です。

広場では、多くの祀り（まつり）が行われて、時にシャーマンのような恍惚状態が尊ばれました。土面の一部にそのような表現があります（鼻曲がり、顔の歪み）。おそらく、異界や祖先、カミガミと交流する機会でもありました。縄文人たちにとって、子孫のつながりを確実にすることは、生み出す性としての女性の力と結びついて、土偶の表象に表れていました。性に関する様々な儀礼や慣習的習俗があったに違いありませんが、具体的には分からないことが多くあります。たとえば、石棒をどのように儀礼で使用したかも諸説あって、はっきりしません。

縄文の世界観では、周りを取り巻く万物が、カミでもありました。精霊が宿る存在という点では、すべての生きとし生けるもの、また周囲の自然もそうであって、他界（異界）からの恵みとして、狩猟・採集・漁労・農耕の産物を、この世に受け取ったのでしょう。命を失った者は、ゴミではなくて、他界に送られるべき存在でした。「送りの思想」「送りの儀礼」は、縄文世界に広く共有されていた観念でした。この考え方は、アイヌ民族の世界観と共通する面が大きいと思われる。あるいは、脈々として縄文から海洋民や、北方古代民、「蝦夷」（古代国家による他称）の人々などに受け継がれてきた系統の思考なのかもしれません。瀬川拓郎氏（2017）は、「縄文の思想」について、考古学、民俗学、歴史学を総合しつつ、学際的に深く論じています。

縄文の世界観と人間類型に対して、西日本の弥生の世界観と人間類型には、大きな違いがあるようです。東日本の弥生文化は、エートスとしては、かなり強く縄文文化の伝統を受け継いでいました。

弥生の思考では、自然とは適応から共生関係に至るものという、基層としての文化（縄文の思考）に加えて、その上の文化層として、自然とは制御していくものという思考が強くなってきました。農耕の生産性を上げ（収穫を増やし）、より多くの土地をコントロールし（支配的な力を及ぼし）、ほかの土地、ほかの人々を、支配を広げる対象として「思考する」ようになってきました。人間集団のエートスにおいて、基層文化のエートスの上に、重層して新たな層が形成されて、次第にそれが拡大、肥大化していったのです。

稲作農耕が、かなり完成した形で、大陸から九州に入ってきた歴史は、農耕そのものと共

に、さまざまな文物や儀礼、信仰が、新しい文化複合としてセットになっていたものでした。青銅器の祀りなどです。石器でも、「大陸系」といわれるセットなどがあります。稲作農耕において、水利が極めて重要であるという性質は、収穫物が蓄積されるものという、日本列島の農耕文化の特質と合わさって、弥生の思考が次第に支配的となりました。他の土地、他の地域を支配するという思考も、自然に肥大化していきました。戦争が始まり、いったん戦乱があれば、憎しみの連鎖という人間の心理も手伝い、エスカレートしていく宿命がありました。

日本文化の基層にあった「縄文の思考」と、その上にかぶさった（重なった）「弥生の思考」は、そのあとも脈々として、重層した思考として、日本歴史のそれぞれの時代を通して、複雑に絡み合ってきました。支配的であり続けたのは、「弥生の思考」でした。歴史学や民俗学では、稲作農耕、それを担う稲作農民が、日本文化の基調であって、社会の主流を形づくってきたという歴史観が、非常に強くありました。しかし、それ以外の要素（山人、マタギ、海民、漂泊民、異民族、エミシ、アイヌ、ほか）は、客観的に考えれば、日本文化が保持してきた、もう一つの主流ということもできるでしょう。

今、私たちは、縄文の思考が持つ、自然との共生、万物の存在意義、大地の母なる力（大地母神）、それは生命の循環という思想に通じる、といった考え方を、改めて見直していくべき時にきているのではないのでしょうか。環境の危機、自然破壊、気候変動、人間の疎外など、山積する現代の危機的状況は、人類の存続さえも脅かすような段階に至りつつあります。国連のグテーレス事務総長は、2023年7月に世界の平均気温が観測史上最高になったことを承けて、地球温暖化の時代は終わり、地球沸騰化（global boiling）の危機がきたと述べました。考古学は、数千年、数万年という単位で人類史を考える分野ですので、現代の状況は極限的な異様そのものに見えてなりません。一方で、最先端の科学および哲学が教えるところでも、物質は絶え間なく循環するという思想は、古くて新しい考え方といえるでしょう。あるいは、東洋思想の代表として仏教が説くところの、「輪廻の思想」と、「縄文の思考」は、実はつながっていると考えることもできるのではないのでしょうか。

東北日本には、縄文の思考が消えてしまわずに、比較的保たれてきた歴史があると思います。このような眼で、現代の文化を見渡してみれば、経済活動、日常生活をはじめ、少し人類の歴史を見直していくことができ、周囲の世界のとらえ方についても、良い方向へ向かった認識を復権できるのではないのでしょうか。

今回は、「東北グローバル考古学」シリーズ24回の完結にあたりまして、通常の実証的な考古学（土器の編年や、文化史の詳細な復元など）から、少し先へ踏み出してみたお話といたしました。

ご清聴まことに有難うございました。次回からは、新しいシリーズでお話いたしますので、引き続き、東北歴史博物館講堂へお運びいただければ幸いです。（最後までお読みいただき、有難うございました）。

(本稿は、講演レジュメに補足し、全体を再構成したものです。なお参考文献については、本講座では3年間の各年度とも、原則日本語のものに限りまし。また、縄文時代に関する文献は、莫大な量があり、ここではまとまった形で縄文時代観が表明されているような書物から、若干を選択してみました。それぞれに方向性が異なります。読者の皆さんは、それらを手掛かりに、さらに文献をたどりつつ縄文時代研究の膨大な森へと(あるいは迷宮へと)、分け入って行かれることでしょう。)

参考文献

- 阿子島香 (1999) 「プロセス考古学」『現代考古学の方法と理論 I』(安斎正人編)、148-159 頁、同成社。
- 阿子島香 (1999) 「書評・須藤隆著「東北日本先史時代文化変化・社会変動の研究—縄文から弥生へ—」」『歴史』第 92 輯、98-104 頁、東北史学会。
- 阿子島香編 (2015) 『北の原始時代』東北の古代史 1、吉川弘文館。
- 綾部恒雄 (1984) 『文化人類学 15 の理論』中公新書。
- 岡村道雄 (2018) 『縄文の列島文化』山川出版社。
- 佐々木高明 (1991) 『日本の歴史 1 日本史誕生』集英社。
- 瀬川拓郎 (2017) 『縄文の思想』講談社現代新書。
- 勅使河原彰 (2021) 『縄文時代を知るための 110 問題』新泉社。
- 藤尾慎一郎 (2021) 『日本の先史時代』中公新書。
- 山田康弘 (2015) 『つくられた縄文時代』新潮選書。
- 山田康弘編 (2017) 『縄文時代』国立歴史民俗博物館歴博フォーラム、吉川弘文館。
- 東京国立博物館特別展図録 (2018) 『縄文：1 万年の美の鼓動』NHK・朝日新聞社他編集。